

今年(2007年度)のノーベル平和賞の受賞者は、地球温暖化防止を訴えているアル・ゴア氏(前米副大統領)と、温暖化防止研究を政策決定に生かすための国連のIPCC(気候変動に関する政府間パネル・事務局ジュネーブ)に決定しました。ノーベル平和賞に関しては、流通とS C・私の視点(516)で、「ワンガリ・マータイ氏」(ケニアの環境問題活動家)を「植林と志とノーベル賞」で取り上げ、また、流通とS C・私の視点(732)でグラミン銀行と創設者の「ムハマド・ユヌス氏」(バングラデシュの経済学者)を「金融業と志とノーベル賞」で取り上げ、理論(メカニズムの解明)だけでなく実践を通じて世の中のためになる成果の事例として紹介しました。

博士号を取得するためには、成果があるないにかかわらず新たな発見とそのメカニズムを解明すればいいわけですが、ノーベル賞は「偉大なる成果」が求められます。

ワンガリ・マータイ氏は植林を通じて内乱(戦争)を終わらせたという偉大なる成果、ムハマド・ユヌス氏は金融を通じて貧困者の自立を助けたという偉大なる成果でノーベル賞を受賞しました。

では、アル・ゴア氏とIPCCは、どのような志を持って偉大なる成果を世の中のためにもたらしたのでしょうか!!

ノーベル平和委員会は、「人為的な気候変動に関する知識を広め、対策の基盤構築に努めた」ことを受賞理由としました。その中で、IPCCの活動を「人間活動と温暖化の関連で共通認識を作った」と評価し、アル・ゴア氏を「温暖化対策の理解を深めるため最も尽力した個人」とたたえました。

我々、地球人は、ほとんどの人々が、地球環境の悪化は感じていましたが、無意識かつ断片的にしか感じていませんでした。当初は地球の温暖化について懐疑的に見られ、批判も受けたが、IPCCは、それを10年以上の時間をかけて、科学的な研究活動を1つずつ積み重ねて検証してきました。そして、アル・ゴア氏が、地球温暖化問題の伝道師として、温暖化の危機を訴える活動をし、中でも、ドキュメンタリー映画「不都合な真実」の中で、気候変動の危機と評し、残された時間は限られていると訴えました。アル・ゴア氏は、元アメリカの副大統領の肩書きをフルに活用し、「南極の氷が溶けるのではなく、私達が氷を溶かしている」と語り、世界の人々に共感を与えました。

アル・ゴア氏とIPCCは、地球温暖化の危機が、人為的な気候変動であることを科学的に検証(IPCC)し、その事実を伝道師として世界の人々に知らしめた(アル・ゴア氏)ことが偉大なる成果です。つまり、「2006年」を基点とするならば、世界の人々(人類)の、地球環境の悪化に対する認識度が、2006年以前と2006年以後は全く変わったことです(2006年のアメリカで「不都合な真実」がアル・ゴア氏によって上映された)。人々は、無意識かつ断片的には地球環境の悪化は感じていましたが、2006年以降は、意識(意味を持って考えること)を持って、かつ連続的(いつも頭の中に存在する状態)に感じるようになりました。この意味を持って感じることは、地球温暖化は具体的に自分達にどのような影響を与えるのかを理解することであり、いつも頭の中に存在する状態とは、行動を起こす前提条件が整っていることです。すなわち、地球温暖化防止のために、絶対に行動を起こさなければならないとの人類としての共通認識が出来たことです。本当の意味の地球温暖化防止対策は、これからのことですが、アル・ゴア氏とIPCCの活躍によって、10年から20年は地球の温暖化への対応としての行動が早まったことは事実です。気候変動は紛争や戦争を拡大させる恐れがあり、人類が気候変動を制御できなくなる前に、今こそ行動が必要であることを、世界共通あるいは人類共通の認識として、意味と行動を伴って訴えたことです。

正に、IPCCの科学的検証とアル・ゴア氏の伝道師が融合し、偉大なる成果をもたらしました。多くの人々が地球環境に関する研究や行動をしています。人類や地球という次元にまで影響を与えなくしては、偉大なる成果ではありません。

すなわち、個人の健康や住環境や都市環境というエコレベルではなく、地球や人類という志の高い提言が人類の意識を変えたことは、正に、ノーベル賞受賞の価値です。

多くの動植物は、地球環境の変化に対してDNAによって自分を変えて対応しますが、人類は、意識革命によって地球を救うことができます。